

巻頭のあいさつ

皆様お元気でいらっしゃいますか？

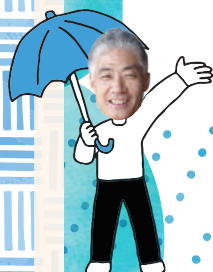
新型コロナウイルス感染症の影響により、皆さま大変厳しい状況であられると思います。

当社は4月13日以降、突然受注が減り、出荷量が大幅に少なくなってしまいました。4月の売上は前年同月比で3割以上の大幅ダウンでした（泣）。

この事態に対処するため、5月には雇用調整助成金の申請をしました。社員さんが交代で休んではいますが、営業日は変わりなく暦通りに生産と出荷を行っています。ご注文も通常通り承っておりますのでご安心ください。

休業手当については100%で協定を結びましたので、社員さんの給料が減ることはありません。雇用調整だけに限らず、助成金や制度はすべて利用し乗り切っていくつもりです。

さらには、状況が回復したときにもすぐに対応できるよう備えていきたいと思っています。引き続きよろしく願いいたします。



緊急事態宣言が出される前に お邪魔してきました。

弾丸出張で、2月には茨城、3月には京都に行ってきました。

茨城は、笠間陶芸大学校にごあいさつと卒業制作展に伺い、同じ時期に行われていた一年後展も拝見、そして、寺本守さまの工房へもお邪魔し、楽しい時間を過ごさせていただきました。

京都は、深見陶治さまのところへ。いただいていた滋賀の佐川美術館でのコラボ展の期限が迫っていましたので、慌てて美術館と工房への日帰り訪問でしたが、快くご対応いただき長居してしまいました。

みなさま本当にありがとうございます。ごさいました。

瀧野直幸



寺本さまと



深見さまと

瀬戸の鉾山事情

愛知県瀬戸市の主たる粘土鉾山は、愛知県陶磁器工業協同組合（愛陶工）と愛知県珪砂産業協同組合（珪砂組合）です。

現在、採掘を行っているのは珪砂組合の第3鉾区のわずかののみ。市場に供給されているほとんどは、掘り貯めた愛陶工のストック分になります。貯鉾を切り崩しているため、平成25年からは供給制限を行い、逐次価格改定もお願いしています。

供給制限の是非はさておき、原土の残りの量から上級グレードのA蛙目はあと5年ほど、中級グレードのC蛙目はあと20年ほどでなくなることが推測されます。

今後も安定して供給していくためには、継続して採掘できる鉾区の開発が不可欠です。これに向けて平成24年ごろより協議を進め、瀬戸市配水場地下の採掘の準備に取り組んでいます。

上水道の施設である配水場の地下を掘るためには、配水場を移設しなければなりません。新しい配水場が今年の8月完成予定で、その後に今までの

配水場が撤去となります。これらに掛かる費用約17億円を愛陶工と珪砂組合で負担しています。

撤去後、粘土を採掘できるようになるのは2年後の見込みです。そして、見込まれる粘土の量はおおよそ40万トン。残念ながら、たった15年分の供給量でしかありません。

現在のストックとあわせると、おおよそ20年分。その先の採掘場所の協議はほとんど進展していません。私たちの世代までは何とか持ちこたえますが、新しい鉾区を開発しないと次の世代に粘土はありません。

配水場がそうであったように、自治体の理解と協力が必要です。今では、名古屋市へのベッドタウンとなった瀬戸市は、窯業と無縁の人たちが多数派となってしまいました。そんな瀬戸市、さらには愛知県を動かすことと、縮む市場で大きな資金を捻出すること。これらが新規鉾区開発の大きな壁になっています。

自社鉾山採掘場



弊社蛙目粘土水簾工場

以前は30軒以上の水簾業者がありましたが、現在、瀬戸市内では粘土の水簾を行っているのは、私どもを含めてたったの4社です。この4社の中で自社鉾山を保有しているのはわが社のみ。設立以来、本山水簾蛙目粘土だけでなく、珪砂も生産したり、タイル向けの粘土を開発したり、海外へ販路を広げたりして、生産量を増やして参りました。しかしながら、近年の業況を打破するには至らず、自社鉾山の採掘は休止しています。が、品質面での安定供給は続けております。

以前は30軒以上の水簾業者がありましたが、現在、瀬戸市内では粘土の水簾を行っているのは、私どもを含めてたったの4社です。この4社の中で自社鉾山を保有しているのはわが社のみ。設立以来、本山水簾蛙目粘土だけでなく、珪砂も生産したり、タイル向けの粘土を開発したり、海外へ販路を広げたりして、生産量を増やして参りました。しかしながら、近年の業況を打破するには至らず、自社鉾山の採掘は休止しています。が、品質面での安定供給は続けております。



はじめまして。株式会社加藤華仙（本名鶴二）が、大正7年に現在地である瀬戸市湯の根町近辺の山を購入したことに始まります。その後、祖父の加藤政良が引き続き、昭和27年に日本陶器（株）（現ノリタケカンパニーリミテド）へ本山蛙目粘土の販売を開始。昭和31年に株式会社加藤政良を設立し、本山水簾蛙目粘土の販売を始めました。3代目は叔祖父の加藤光哉、私で4代目となります。

Misaki's トーク



はじめまして。次女の水咲(みさき)です。今回、姉兄同様に私も強制的に書かされています(笑)。

以前、私が中学生の時、

卓球の試合を父がこのニュースレターで取り上げていました。今年、高校を卒業し、4月から地元の西九州大学看護学部に進学しました。

しかし残念ながら、コロナウイルスの感染拡大防止のため、入学式は中止。さらには、これを書いている時点ではまだ web での講義しかなく、実際に学校へ行ったのは、オリエンテーションや説明会などの3回だけです(泣)。

西九州大学は佐賀県唯一の4年制私立大学です。看護学部のみキャンパスが小城で、他の学部のキャンパスは神埼にあります。小城の方が神埼より自宅に近いです。通学には電車を使うのですが、登校中止になったので、買っていた定期券を使う前に慌てて払い戻しました。

Web での講義という、カメラを通して会話形式や映像で行う講義をイメージされると思いますが、西九州大学はインターネットアクセスの集中を想定して、それは行わず大学専用の web ページで講義の内容や課題が配られ、自分で取り組み、web ページやメールで課題を提出するという流れになっています。質問などはメールで直接担当の先生に聞くことが出来ます。今後は、ZOOM を使った遠隔授業も予定されています。

また、週に一回担任の先生から電話がきて、健康状態の確認などがあります。不安なことなどはすぐにその先生にメールや電話で相談できるので安心です。

4月からずっと家にいる状態が続いているので、怠けてしまい、大学に行くときは大変だなと思います(汗)。また、友達と遊ぶことも出来ないのが寂しいです。

でも今は遊びを我慢して、社会で起きていることを観察しながら、将来同じことが起きた時に対応し、正しい行動ができるよう、これから医療の知識をしっかりと学んでいきたいと思っています。

新しい生活での勉強や友達作りはもう少し先になりそうなので、楽しい学生生活が待ち遠しいです！

水咲 渚



学校の前で★

ニュースレターの感想
お待ちしています♪

いつもお読みいただきありがとうございます！
スマホやパソコンから
ニュースレターの感想

が簡単に投稿できるようになりました。ご意見、ご感想をいただくと励みになります♪

ご意見ご感想は
こちらから★



大失敗をした私は、ボールミルで粘土を作るための知識と技術の重要性を痛感し、岐阜県多治見市の(株)マルイ陶料所(現マルイクレイアンドセラミックス(株))さんに教えるを乞います。マルイ陶料所さんとのご縁は、この時から遡ること3年前、当時の社長の伊藤正信さん

第21話

昔話

会長さんの



たちが、当社のスタンパー(キネとウス)と水簾(すいひ)設備を見学にいらいっしやったことに始まります。こちらの地域の特徴的な粉碎方法であるスタンパーに対し、マルイ陶料所さんはじめ、岐阜県や愛知県ではボールミルが一般的です。加えて、こちらの地域での水簾のやり方と、岐阜県や愛知県での水簾のやり方が少し違っていることから、それを見学するために

水簾は水の中で粗い粒子と細かい粒子を分ける操作です。われわれは、水草陶石を砕いてから、水簾を行うのですが、このとき用いる水は循環させています。循環させている水の流れる中で、大きな異なる粒子を3段階に分けています。一方、岐阜県や愛知県では蛙目粘土などの水簾が行われています。分級は同じ3段階ですが、最終的に捕集する粒子の大きさは、われわれよりずっと小さ

く5ミクロン(1000分の5ミリ)以下がほとんどであるため、沈殿に時間がかかります。ですので、水は循環するのではなく、常に新しいものを供給しながら、水簾を行います。この時、マルイ陶料所さんはスタンパーを使った土の生産を計画されていました。そのため、スタンパーでの砕き方と水簾のやり方を、そして設備そのものを詳細に見学され、しばらくの間に虎沢さん(土

だったと思います)が、おおよそ1ヶ月の実習にいらっしやいました。虎沢さんには、私どもの土づくりを余すところなく体験していただき、マルイ陶料所さんがスタンパーと水簾の設備工事をされる際には、こちらから第一宮崎鉄工所さんを派遣しました。こうして出来たのがマルイ陶料所姫工場のスタンパー陶土設備です。それから1年後、今

この当時は最新式だった弊社のスタンパー陶土設備



間の実習をさせてもらうため多治見へ向かいました。(次号につづく) 渚野義則



渚野 陶磁器

<https://fromform.jp/>

有限会社 渚野陶磁器原料

〒849-1426 佐賀県嬉野市塩田町大字五町田乙 287-1

TEL 0954-66-4207 / FAX 0954-66-3747 / E-mail info@fromform.jp

このニュースレターは、これまでご注文いただいた方、サンプルをお送りしました方、名刺交換をさせていただいた方など、ご縁がありましたみなさまにお送りしております。必要のない方は、たいへんお手数ですがその旨を上記までご連絡ください。